

スチュアート ヘンリ編

『野生』の誕生 ― 未開イメージの歴史

田 畑 久 夫



2003年10月20日発行
世界思想社
B6判 280頁
定価 2300円(本体)

近年文化人類学は著しい学問的な発展を示して

いる。従来文化人類学といえば、近代文明から遠く隔てた辺境の地において、外部世界との交流をほとんどもない閉鎖的社会に近い生活に従事している人びとに関する民族誌的な調査や研究が主体であった。このような研究は、変貌あるいは消滅しつつある社会についての詳細な記録を残すという意味において、貴重なものであるといえよう。

しかしながら、かような調査や研究は、現代に生きる我々の大部分の社会とは直接の接点を有しない。本書は「未開イメージ」という述語をキーワードとして、閉鎖社会に近い生活を送っている狩猟採集民の批判的な検討を通して、「イメージ構築」という他者化の装置によって進められてきた欧米近代社会による支配の構図を検討し、批判するための礎石となる」(7頁)ことを目指したものである。近年、このような「イメージ」に代表される「表象」を扱った類書は、文化人類学を筆頭に人文地理学など他の関連諸科学分野の研究に

関しても増加傾向にあるといえる。

しかし、他の類書の執筆者が直接フィールドに出かけて調査を実施したのではなく、既存の調査報告書あるいは研究書から事例のみを抽出して論じたり、さらには執筆者は抱くイメージのみによって論を展開していると思われる者が度々みられる。この種の類書は内容としては非常に興味深い、執筆者によるフィールドサーヴェイが行なわれていないため、執筆者の空想空論に陥り、客観性に欠けるものが多いといえる。

この点に関して、本書の大半の章は執筆者自身によるフィールドサーヴェイの成果から得られた資料に基づいて議論がなされていることが特色となっている。そのことにより、読者にとって大変説得力をもつ内容が展開されている。

本書の出発点は、一九九八年西南学院大学で開催された日本民族学会の第32回研究大会における分科会での討論であり、その後国立民族博物館の *Senri Ethnological Studies* (2002) など深化し

たものが骨子となっている。本書の概要については、本書(19〜24頁)に要領よく要約されているが、筆者なりに簡単に整理すると次のようになる。すなわち本書は、

序章 「野生」をめぐるイメージの虚実

スチュアート・ヘンリ／大村敬一

第1章 野生と野生の誕生―古代から18世紀まで

スチュアート・ヘンリ

第2章 石器時代人としてのサンの表象について

―映像、観光、博物館展示

池谷和信

第3章 野性の残像―過去をめぐるイデオロギー

の磁場

小川英文

第4章 狩猟採集社会の思考モード

フラン・バーナード

第5章 都市的部族の胎動―土地権制度と都市の

アボリジニ

鈴木清史

第6章 カントリーの生命を維持するために―牧

場開発とアボリジニ

保刈 実

第7章 野生の思考の可能性―イヌイトの他者表

象にみるプリコラージュの秩序

大村敬一

第8章 「野生」の他者化を回避するためにノ

スタルジアとアンビヴァレンス

小田 亮

第9章 野生から未開へー19世紀以降の未開観念

スチュアート・ヘンリ

という構成となっている。

序章は、「野生のイメージの背後には、野生／文明という対立軸で世界をとらえる二元論的な世界観があることは明らかだろう」(1頁)という従来の世界観に対して疑問を提示することから論が進むが、この点の歴史的な説明こそが本書を貫いているテーマであるといえよう。

第1章は、古代から16、18世紀のヨーロッパで解釈されてきた種々の野生概念の歴史的系譜を考察することによって、野生と未開とは単一の基準によって定義できるものではないことを主張する。

第2章は、南アフリカに居住するサンをとりあげている。本書では、サンは石器時代の残存物であるという、様々な媒体によってつくられてきたサンのイメージの検討を、映像、観光、博物館展示の3例を中心に文化人類学的側面から論じている。

第3章は、過去のイメージを描く場合の枠組として、ナシヨナリズムというイデオロギーと、他者である狩猟採集社会に対する考古学的側面から

の理論的検討がされている。

第4章は、前章同様狩猟採集社会の理論的な研究である。すなわち、従来において生業形態によって定義されてきた狩猟採集民のカテゴリーを問題とし、思考様式による狩猟採集民の新定義という新しい視点が出される。さらにこの集団の思考モードにも言及がなされている。

第5章と第6章の2章は、オーストラリア大陸の先住民であるアボリジニに関する論考である。内容は、都市内部に居住するアボリジニの土地権制度を説明した第5章と、牧場開発とその周辺地域に居住し、牧場労働にかかわっているアボリジニを論じた第6章のいずれも実証的な調査に基礎づけられたものである。

第7章は、極北ツンドラ地帯に居住するイヌイト／ユピクの人びとの他者表象の原理である、「栽培された思考」と「野生の思考」を扱っている。執筆者はフィールドサーヴェイを通して、後者の「野生の思考」の可能性を見いだすことに成功している。

第8章も第7章同様「野生の思考」の位置づけに関するものである。その中でも特に野生の他者化を回避するにはどのようにすればよいかを理論的に検討している。これらの両書はともに、レヴィ・ストロースの理論を基礎に論が展開されてい

る点が特色といえる。

第9章は本書の総括とでも称すべき章である。つまり、19世紀以降の公準としての未開概念をとりあげ、現在までの未開と野生のイメージの系譜を述べている。そこでは、当初存在した「野生」という空間的なイメージが、人間の心性イメージに転換し、その後「未開」という新たな概念に受けつがれたことが強調されている。

このように、本書は、各執筆者の専門とする狩猟採集民のフィールドサーヴェイより生まれた未開イメージに関する学際的な研究であるといえる。内容の一部には、レヴィ・ストロースの提唱する「野生の思考」の吟味をはじめ、ある程度文化人類学の基礎的な知識がなければ理解が困難な箇所もみうけられる。とはいえものの、今後の文化人類学研究の一つの方向性を示したものとして、本書は高く評価できると思われる。特に、これから文化人類学を専攻しようとする若者に対して強く推したい好著である。

(たばた ひさお 本学大学院教授)